

拙者親方(せつしやおやかた)と申(もう)すは、お立合(たちあい)の中(うち)に、御存(ごぞんじ)のお方(かた)もござりましようが、お江戸(えど)を登(た)つて二十里上方(にじゅうりかみがた)、相州小田原一色町(そうしゅうせいらいしきまち)をお過(すぎ)なされて、青物町(あおものちょう)を登(のぼ)りへおいでなされるれば、欄干橋虎屋藤衛門(らんかんはしこねふじとうゑもん)只今(ただいま)らんかんばしとらやとうえもんたたいまは剃髮致(ていは)つたして、円齋(えんさい)となおります。

元朝(げんてい)がんちようより大晦日(おおつごもり)まで、お手(て)に入(い)れます此(この)の薬(くすり)は、昔(むかし)ちんの国(くに)の唐人(とうじん)、外郎(ういらう)という人(ひと)と、わが朝(あ)ちようへ来(きた)り、帝(みかど)へ参内(さんない)さんだいの折(おり)から、この薬(くすり)を深(ふか)く籠(こめ)置(お)き、用(もち)ゆる時(とき)は一粒(いちりゅう)ずつ、冠(かんむり)のすき間(ま)より取(とり)出(い)だす。

依(よ)つてその名(な)を帝(みかど)より、とうちんこうと賜(たま)わる。

即(すなわ)ち文字(もんじ)には「頂(いた)だき、透(す)く、香(にお)い」とかいて「とうちんこう」と申(もう)す。

只今(ただいま)はこの薬(くすり)、殊(こと)の外上(ほかせ)じように弘(ひろ)まり、方々(ほうほう)に似看板(にせかんばん)にせかんばんを出(い)だし、イヤ、小田原(おだわら)の、灰俵(はいばら)はいだわらの、さん俵(だわら)の、炭俵(すみだわら)のと色々(いろい)ろに申(もう)せども、平仮名(ひらがな)をもつて「ういらう」と記(し)るせしは親方(おやかた)えんさいばかり。

もしやお立合(たちあい)の内(うち)に、熱海(あつみ)か塔(とう)の沢(さわ)へ湯治(とうじ)にお出(い)でなされるか、又(また)は伊勢御参宮(いせごさんぐう)の折(おり)からは、必(かな)らず門連(かどちが)いなされますな。

お登(のぼ)りならば右(みぎ)の方(かた)、お下(くだ)りなれば左側(ひだり)がわ、八方(はつぱう)が八(や)つ棟(むね)、表(おもて)が三(み)つ棟(むね)玉堂造(むねぎやうどう)づくり、破風(はふ)には菊(きく)に桐(きり)のとうの御紋(ごもん)を御赦免(ごしやめん)あつて、系図正(けいずた)だじき薬(くすり)でござる。

イヤ最前(さいぜん)より家名(かめい)の自慢(じまん)ばかり申(もう)しても、ご存知(ぞんじ)ない方(かた)には、正身(しょうしん)の胡椒(こしょう)の丸香(まるのみ)、白河夜船(しらかわよふね)、さらば一粒食(いちりゅうた)ぶかけて、その気見合(きみあ)いをお目(め)にかけましよう。

先(ま)ずこの薬(くすり)をかように一粒舌(いちりゅうした)の上(う)へにせまして、腹内(ふくなく)へ納(おさ)めますると、イヤどうも云(い)えぬは、胃(い)、心(しん)、肺(はい)、肝(かん)がすこやかになりて、薫風咽(くんぷうのんど)より来(きた)り、口中(こうちゆう)ぶりを生(しょう)ずるが如(ごと)し。

魚鳥(ぎよちょう)、茸(きのこ)、麵類(めんるい)の食合(くいあ)わせ、其(その)他(ほか)、万病速効(まんびようそくこう)ある事神(ことかみ)の如(ごと)し。

さて、この薬(くすり)、第一(だいいち)の奇妙(きみょう)きみょうには、舌(した)のまわることが、銭(ぜ)にゴマがはだして迷(ま)にげる。ひよつと舌(した)がまわり出すと、矢(や)も盾(たて)もたまたまぬじゃ。

そりやそりや、そらそりや、まわつてきたわ、まわつてくるわ。

アワヤ咽(のど)、さらな舌(した)に、カ牙(げ)サ歯音(しおん)、ハマの二(ふた)は唇(くちびる)の軽重(けいじゆう)、開合(かいごう)さわやかに、あかさたなはまやらわ、おごそこのほもよろを、一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ、盆(ぼん)まめ、盆(ぼん)ごめ、盆(ぼん)ごぼう、摘蓼(つみまめ)、つみ山椒(さんしょう)、書写山(しよしゃざん)の社僧正(しゃそうじよう)、粉米(こなめ)のなまがみ、粉米(こなめ)のなまがみ、こん粉米(こなめ)の小生(こなま)がみ、繻子(しゆす)ひじゆす、繻子(しゆす)、繻珍(しゆちん)、親(おや)も嘉兵衛(かへい)、子(こ)も嘉兵衛(かへい)、子(こ)も嘉兵衛(かへい)、親(おや)かへい子(こ)かへい、子(こ)かへい親(おや)かへい、ふる栗(くり)の木(き)の古切口(ふるきりぐち)。

